

開催地名：徳島県北島町	
開催日時	令和4年9月28日（水） 19：00～20：30
開催場所	北島町立図書館・創世ホール
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	自主防災会・女性防災会・防災士の会・町職員等 120名
開催経緯	もともと町内で大災害が起こったことがないため、町内の災害への危機感が薄く、「共助」の必要性や重要性が理解されていない。また、感染症流行のため町内の防災活動が滞り、町内の南海トラフ巨大地震への防災意識が薄れている懸念がある。一方で「北島町防災士の会」が発足しているが、活動の方向性や内容が決まっていない事情もあるため、今回の語り部による講演会を、町内の防災活動の活性化の手立てとしたい。
内容	<p>（1）福住町における自主防災組織発足の経緯</p> <p>福住町は2つの川に挟まれた町であり、水害に見舞われることが多い土地である。特に、昭和61年の台風10号による被害は甚大で、その当時の苦い思い出が2003年の自主防災組織発足につながった。それが今日の「福住町方式」の基礎となっている。</p> <p>私たちが数々の災害を経験して何よりも必要だと感じたのは、「住民の安全確認のための名簿」である。そのため、2003年にはまず要支援者および住民全員の名簿作成を行った。この名簿は、現在でも年一回の防災訓練のたびに更新を続けている。名簿の作成とともに、わかりやすい防災マップ作成や、さらには近隣市町村を中心に「災害時相互協力協定」の締結を進めた。この協定は、大災害が発生した場合に相互に助け合うことを目的としたもので、災害時に起きたボランティアとのトラブルから教訓を得た活動である。災害の被害が大きければ大きいほど、外部から救援の手が入るのは遅くなってしまう。だからこそ、いざというときは自分たちの手で対処しなければならない。</p> <p>（2）東日本大震災時の記憶</p> <p>福住町は津波による直接の被害こそなかったが、堤防は所々崩れ、家の中はどこもめちゃくちゃになった。安否確認を実施後、避難所開設を始めた際に、まず作ったのはトイレとゴミ置き場である。併せて、炊き出しの準備も行った。日頃の訓練の成果が出て、暗くなる前にこれらの準備を終えることができた。福住町は人口1,500人程度の小さな町であり、災害時の収容施設も大きくないし、備蓄品もそこまで多くはない。しかし、東日本大震災当時は、周辺市の帰宅困難者、および津波から逃げてきた人々が福住町へ殺到した。500人収容予定の施設に2,000人が詰まっていた。支援が必要な人や、乳幼児や妊婦さんなど、手厚いケアが必要な人は小学校等の避難所から集会所へと誘導した。実際、避難してくる人の約8割は支援が必要な災害弱者と呼ばれる方々である。当時の避難所運営時に、女性による細やかな対応の重要性を感じた。だが、避難所運営マニュアルに女性の参画はなかった。この経験から、私は研修を受けて女性防災リーダーを目指すようになった。</p> <p>（3）その後の地域防災活動</p>

福住町の防災訓練は、「自分たちの町は自分たちで守る」をモットーに行われる。普通なら消防の人に来ていただいて教えてもらう形式かと思うが、私たちは 15 年前から、自分たちだけで訓練を行っている。災害の規模が大きければ大きいほど、警察や消防は対応に駆り出されていなくなることを想定しているからだ。自分たち自身で考え、実行していくこと、もしもの時にトップがいなくても問題がないように対応すること、それが福住町方式である。

災害時に行政に頼りたい気持ちはわかるが、行政も被災するので、スピーディに公助を受けることは期待できないし、東日本大震災時にはこの点が証明された。災害発生から 3 日間は公助を期待せずに、自助と共助で対応することを普段から訓練して備えておくことが大切である。そして、防災は日常生活そのものであると認識し、様々なイベントや活動の中に防災につながる事象を意識して散りばめることで、多くの人々が参加して防災の取り組みは活性化する。備えて、知識を得て、訓練をする。そして、忘れないことが重要だ。これが命を助けることにつながっていくと私は信じている。



開催地より

東日本大震災を経験された語り部から、自主防災組織の取組みや震災時の具体的なお話を伺うことができ、改めて災害に対するイメージを強く認識することができたと思う。これから当町で取り組んでいかなければならない防災活動について、一つのヒントとしていきたいと思う。早速地域のつながりに関する取組みと、要支援者名簿の作成に取り掛かりたい。